

# 岐阜県下白山東・南麓における猪害防除

矢ヶ崎 孝 雄 金沢大学名誉教授

## WILD BOARS AND THE PROTECTION OF FARM CROPS AT THE FOOT OF MT. HAKUSAN IN GIFU PREFECTURE, JAPAN

Takao YAGASAKI, *Professor Emeritus Kanazawa University*

### はしがき

ここで研究対象地域とする岐阜県下、白山東・南麓は、東麓で庄川筋の大野郡 荘川村・白川村、南麓で長良川筋の郡上郡高鷲村・白鳥町の地域である(図1)。なお、九頭竜川源流部の白鳥町石徹白の地域も含めて考察する。この石徹白の地域は昭和33年に福井県石徹白村の大部分が岐阜県に転属し、白鳥町に所属し今日に至っているところである(矢ヶ崎, 1963)。

標高2,702mの白山は深雪地帯に位置し、その名称の如く白雪に覆われ、わが国の三名山の一つに数えられ、信仰の山岳として知られてきた。積雪の著しいことはイノシシの生息には不適で、降雪をみる頃にはイノシシは暖地の南に移動し、春に再びこの地域に進入して来る。なお、イノシシの生息にはドングリの堅果を産む広葉樹林が必要であり、岐阜県下では標高1,500m 辺までに生息するとされている(岐阜県哺乳動物, 1987a)。一般的に一冬当たり30 cm以上の積雪、平均積雪日数70日以上地域では、イノシシの生息が認められない状態である(環境庁, 1983)。白山周辺地域はその北限に相当し、現在は石川・福井両県下では見られないか、見られても稀である。岐阜県側では白川村域で同様に生息していない。一方、荘川・高鷲村、白鳥町の地域では生息し、過去においては白川村を含めてかなり生息し(奥美濃, 1981)、農作物に対する猪害も甚大であった(岐阜県, 1978)。白山をとりまく山麓地域における猪害は地域的特色も著しいと推察している。北陸側の考察(矢ヶ崎, 1992・1993)とならんで、ここでは岐阜県下の白山麓につき調査研究した。

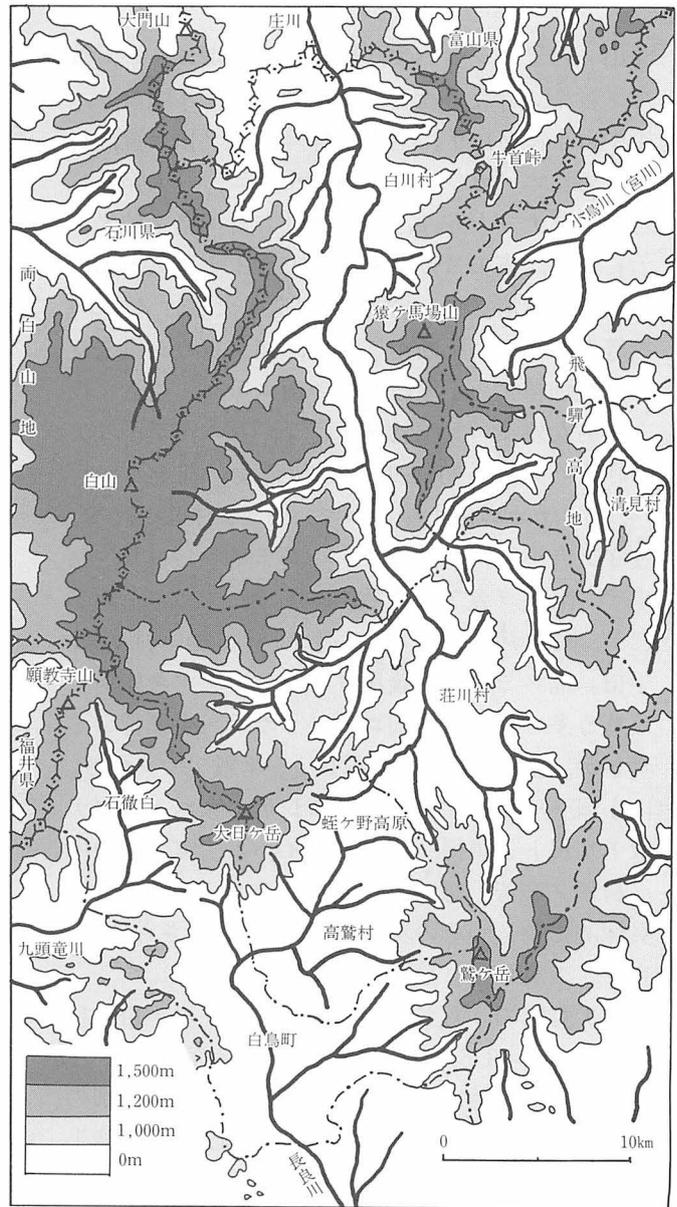


図1 岐阜県下白山東・南麓地域

## 猪害とその防除

## 白川郷

荘川村・白川村は、村域の中央を北流する庄川の源流部に位置している。近世は飛驒天領で、白川郷と称されてきた。飛驒は古来、「食たらず、人余りある国」といわれ、一般に食糧自給の不可能な地域であった(矢ヶ崎, 1957)。水田は乏しく、特に焼畑で穫れるヒエその他雑穀を主食とし、その生産に力を注いできたが、なお不足で米を多量に移入してきた。

近世末期の事情を示す『斐太後風土記』(富田 明治)に、小島郷(清見村)・白川郷(荘川村・白川村、清見村の一部)・川上郷(清見村・高山市の一部)はじめ深山の村々の猪害に関して次のように記している。

「深山ノ村里オシナヘテ、居村ノ本田畑ヨリハ、焼畑ノ雑穀、作毛多ケレバ、初秋穂ノ出ル頃ヨリ、山中ニ小屋ヲ掛テ、老人兒等ニ、家ヲ預ケ置、村中ノ男女オノカジシ、山畑ノ小屋ニ、一人宛別レ行テ、ヨナヨナ守リ、案山子[方言ニ猪ノ曾米ト云]ヲ立、夜モスカラ鳴子[方言土宇豆久ト云]ヲヒキ、猪笛ヲ吹、[桐木ヲ以造ル火吹竹ノ如シ]板等ヲ打鳴シ、不断声ヲ揚テ、猪ヲ驚カシ逃去シム、焼畑多ク、小屋数モ多キ山ニテハ、遠近ノ夜守ノ男女処々ニテ鳴物ヲナラシ、互ニ声ヲハリアゲ呼カハス故ニ初秋ヨリ募 秋穀物ノ刈上ルマデハ、ナカナカニ山小屋ハニギハヒテ、村里ハ寂寥、夜守ノ者小屋ニテ熟睡スレハ其ヲネラヒヨリ、猪来テ、作毛ヲ食アラス故、終夜 聊 怠ラス、声ヲアゲ、鳴物ナラシテ、猪ヲ追コトハ、里ノ村々ノ、平田ニ稲ノミ作ル、農民ヨリハ、イタツキ如何バカリカ多カラム、同国ニ生レナガラ、生涯稗ノミ食ヒテ、苦勞スル山中ノ村民ト、米穀アマタ作り、山小屋ノワビシサヲモシラズシテ、家ニノミ寝テ取上ル民トノ損得、何レトカイハム、実ニ深山中ノ村民ノ辛苦、想像テ憐ムベキ事ナリケリ。」

具体的に精しくその実情を記したうえ、さらに「山畑夜守」の着色さし絵も示してある(図2)。

飛驒大野郡のうちで焼畑の中心地は荘川・白川村(上島, 1949・1956)で、とくに荘川村は面積が広く、食糧の自給的な地域であった(上島, 1952)。焼畑の主要作物はヒエであり、『斐太後風土記』の分析結果によると、ヒエは飛驒で97%の村に普及していた穀物であった(小山外, 1981)。これをねらうイノシシの防除は専ら小屋掛けをして鳴物すなわち音で追い

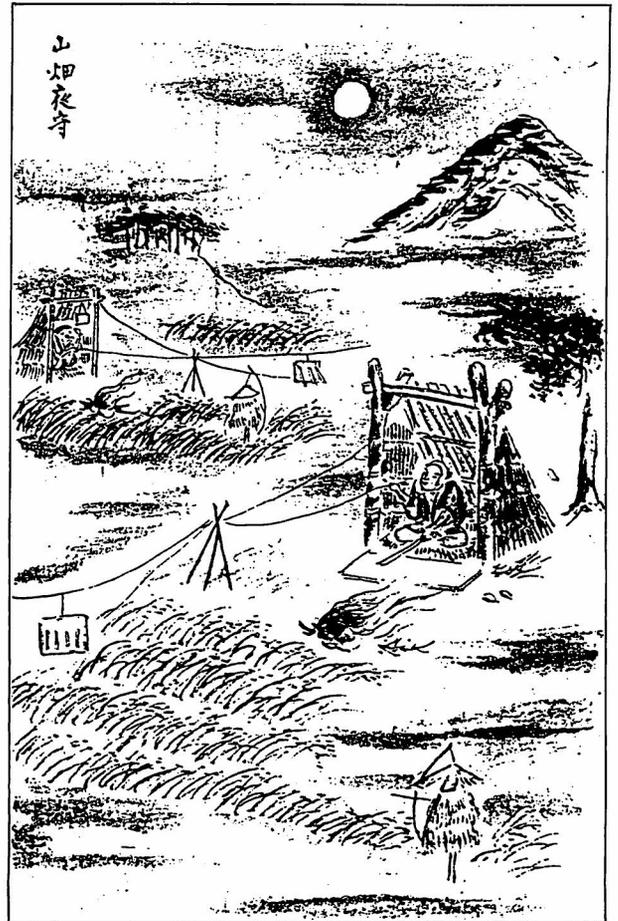


図2 焼畑における猪追い  
(国立公文書館蔵『斐太後風土記』による)

払ったのである。上記の曾米・土宇豆久・猪笛・板のほか、清見村ではこれらのほかに肥桶を天秤棒でこすり(オケズリという)、出る音と人間の音声などと焚火や臭気を発する蚊火などを用いた(清見村, 1986a)。「斐太後風土記」の著者が飛驒山村の辛苦を、平地の米作民と比較して、憐れんでいる点、筆者も深く共感するものである。

なお、白川村御母衣にある国指定重要文化財の旧遠山家には、邸の周囲にある常畑のはずれに「しし小屋」(ししばい小屋)があり、イノシシを追った。白川村教育委員会調査の遠山家略図(図3)では「しし小屋」のほか、母屋の周囲に作業場・はたおり・かじ小屋などを配置し、大家族制による豊富な労働力による経営の生活実態が伺い知られる。シシ追いはこの労働力により行われ、老人や子供に依存しなくてもよいことも理解できる。

山村民のシシ追いの音声は歌謡になるのも当然といえよう。夜守唄「ししばやし」(ししばい)があり、それが数多い焼畑離子(なぎばやし)のなかでも多

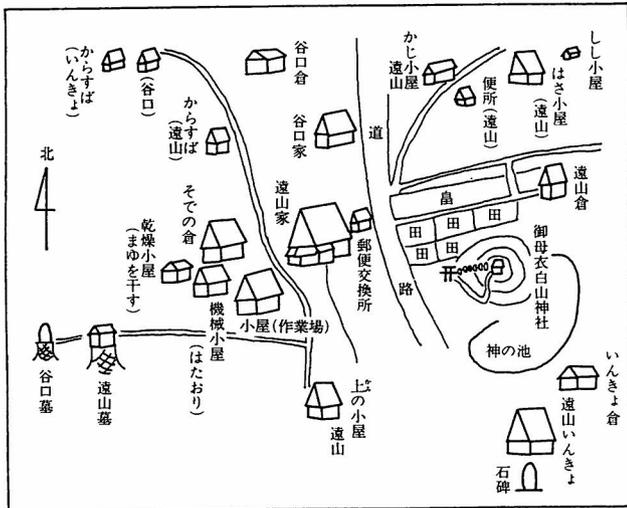


図3 白川村御母衣 旧遠山家・谷口家の家屋等配置略図  
〔大正末期～昭和初期〕

(白川村教育委員会資料)

数を占め、しかも傑作のものといわれている(山田, 1940b)。一例を挙げれば次のようである。

「土土豆久 ひきやるなら ちゃんから どいと  
ひきやれ 下の田圃へ 猪が出る。下の田圃へ  
猪が出る。猪が出たとて 稲喰やせぬわい ね  
ねに ねづいた 猪じやものう。猪よ 猪よは  
ねむたの さかり とろり したまに ひと谷  
なめられたあ。」

これらは夜間しし追いの長時間に亘る発声、眠気ざましの中から、自然に生まれたものといえよう。なお『斐太後風土記』によれば、夜守でイノシシを追い払うものの、「聊ノ隙ヲ考へ、猪ヲリヲリ出テ、作毛ヲ食アラス故、村民皆々猪ヲ悪ムコト、恰モ怨敵ノゴトシ」と村民は思っていた。

荘川村では(荘川村史, 1975a)、焼畑(ナギ)耕作で蚊・虻が群がり襲いかかるので、カビ(蚊火)で防ぎ、食事は虻除の小屋(猪追いの番小屋にもなったと思われる)で入口を閉めてとった。郡上方面から50~60頭のイノシシが侵入してくるのに対しては、番小屋に泊り、「猪番」をして追った点は上記と同じである。さらに柵・石垣を畑の周囲につくり、イノシシの進路にはシシアナを掘り生捕りもした。なお、白川村御母衣の猪穴には内側に玉石を積む習慣があった(野本, 1984a)。この設置が常畑か焼畑か、その設置地点は明らかでないが、かなり永続的な使用のもので常畑に接したものとみられる。

白川村史編集室長の角竹弘先生に案内していただいた長瀬の焼畑には、猪土手と落とし穴があった。焼畑で火入れの延焼を防ぐため、火道をその周囲に掘り、その土を盛り上げて猪土手とした。現在、林

道脇に溝と土手があり、雑草に埋もれている。焼畑跡地は40年くらい経過し、植林されている。これは永久的な猪垣とはいえないが、焼畑の猪垣として注目されるものである。ちなみに清見村でもこの手法が用いられ、火道は薙畑跡地にどこでもみられる(清見村, 1986b)。一般に飛騨では火道守が3尺余(約1m)の幅に火道を伐り、土を盛り上げて火防の土堤を造った(山田, 1940a)。なお、火道は奈良県十津川村(宮本, 1993a)や、四国・静岡・長野・山梨・熊本・鳥取の諸県の焼畑でも広く用いられていた(野本, 1984b)。一方、宮崎県椎葉村では、キリマハシといって焼畑の周囲の雑草を道路のように伐り払い、その草を垣根のように積んでイノシシを防いだ(倉田, 1995)。ただし、名称は多様でもあり、興味深い。

ところで、清見村の三谷地区では、現在田畑にトタン柵(1973より)や電気柵(1955より)などを共同で設けて、猪害防止に努めている(浦山・高橋, 1995)。一方、白川村は前述のようにイノシシの生息はなく、民俗学の研究書(川口, 1934; 江馬, 1975)にも、関係の記載はみられないことも注目されよう。ただし、荘川村では高鷲村の方からイノシシが移動してき、南部の地域で現在も猪害がある。村上秋夫教育委員会事務局長より次のように教示をいただいた。前記の柵・石垣は高鷲村に接する黒谷・寺河戸・一色・惣則地区で設けられていた。昭和初期までは用いられていたが、現在はその痕跡の見あたる所はないという状態である。現在、猪害に対しては回転燈・バクチク・トタン柵・電気柵・有刺鉄線柵などを用い、光・音・防柵により防除している。また、昭和の中頃まではシシアナを「けものみち」に設けていた。前記の黒谷・寺河戸・一色・惣則の地区では水田に被害があり、一色のユリ自生地でも春から7月にかけて害を受け、ここでは電気柵を設けている。一方、有害鳥獣駆除申請の狩猟者がイノシシの尻尾をとり、補助金を貰うこともある。猟師は白鳥町に10人位いる。大正の頃まではシシツキヤリを用いたが、今はほとんど残っていない。

イノシシの捕獲や狩猟は猪害防除の効果的な手段であるが、作物の収穫期でないという意味は少ない。狩猟は初雪の降り積もった時期、イノシシは行動がふくなり、仔をつれ、雪の少ない郡上郡や益田郡へ移動するのをヤリで捕った。『斐太後風土記』にはその勇壮な絵が掲載されている(図4)。このシシツキヤリはかつてはたいていの家にあった(荘川村史,

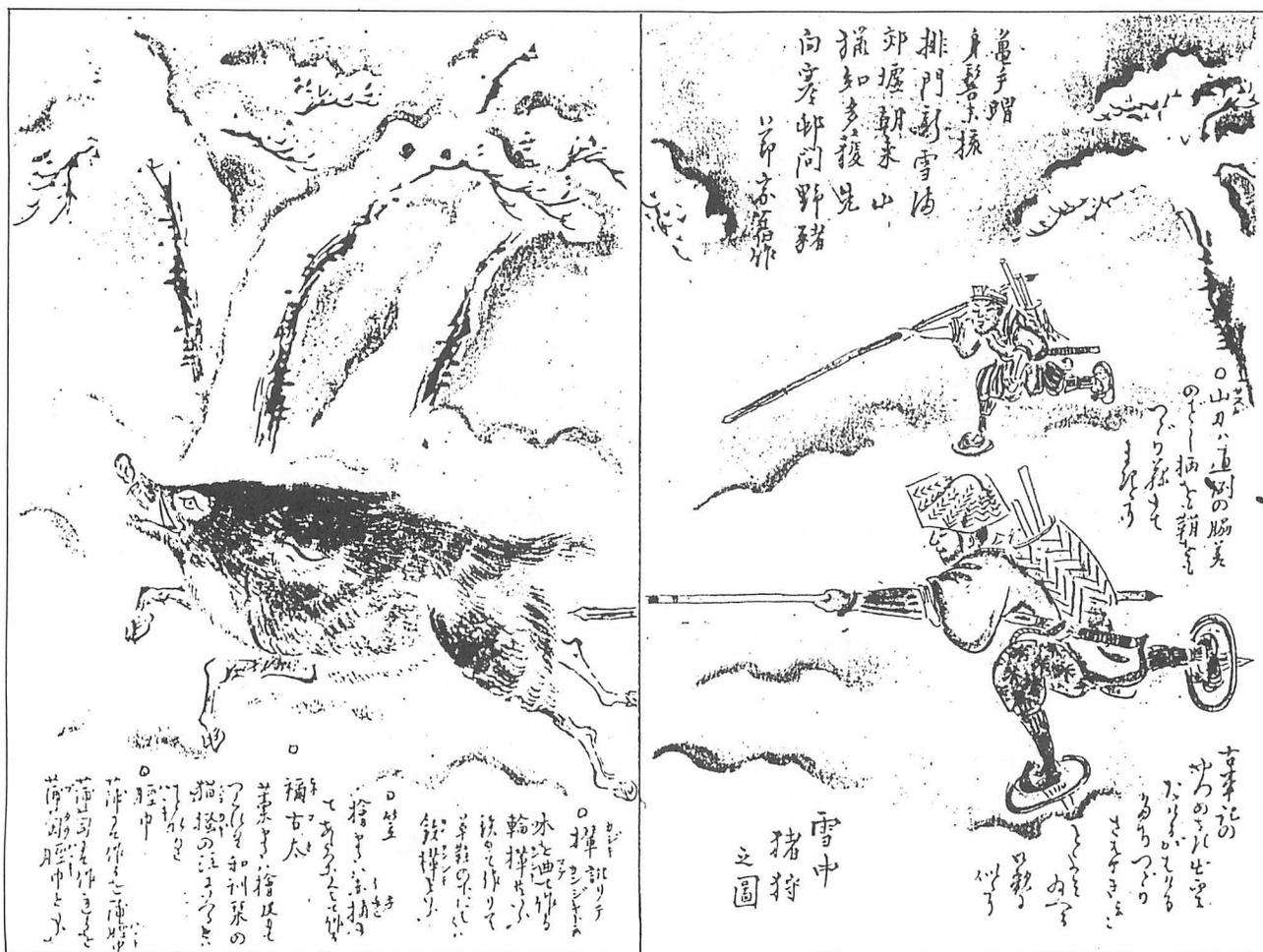


図4 雪中の猪狩り

(国立公文書館蔵『斐太後風土記』による)

1975b)。なお、白川村ではかつては雪中に宿ってイノシシ猟を行った(白川村史, 1968)。

白川村教育委員会は、有形民俗文化財調査で4本のヤリを登録している(図5)。これらはクマトリヤリ・クマガリヤリと称されているが、イノシシの捕獲にも用いられたようである。このうち1本は室町時代のヤリの改造であり、他は江戸時代の野鍛冶の作とされている。前記旧遠山家のカジ小屋はこれらの製作か修理に関連するものともみられる。

猪害防除、イノシシの捕獲に効果的な鉄砲は飛驒でも用いられた。飛驒代官長谷川忠崇(1776没)著『飛州志』によれば、飛驒にあった鉄砲数は917挺、うち獵師鉄砲734挺、威鉄砲183挺であった(長谷川, 1969a)。威鉄砲は冬は官庫に納め、2月に村里に貸し、9月までは玉を込めず音のみを發し、鳥獸をおどし追い払ったが、これは古来の仕来りであった(ひだびと, 1935)。獵師鉄砲に比し、威鉄砲は数が著しく少なく、結局農民は前記の音などによる手段で焼

畑を守らざるを得なかったとみられる。また獵師鉄砲も村に割り当てると、数は決して多くはなかった。なお前記の白川村教育委員会の有形民俗文化財調査資料のうちに火繩銃の銃身がある。白川村平瀬(上村)の坂本三智代家の蔵より見出されたが、平瀬上村の旧7戸に火繩銃があったと伝承されている。この点からすると、江戸時代白川村にはかなりの鉄砲があったとみられ、それは代官の管理外のものとも推察され、猪害防除に役立てられたと考えられる。

ちなみに、明治14年(1881)の岐阜県図書館蔵「各村畧誌」(岐阜県記録, 1881)には民有銃の記録があり、白川村にはそのうち職獵銃4挺、莊川村には同じく1挺があるのみで、この数値は益田郡に比して著しく少なく、大野・吉城両郡の諸村に比べても多い方ではない。なお、広く用いられていた威鉄砲が両村に全くない点も特色である。ただし、威鉄砲は明治以降、岐阜県下では全般に極めて少なくなっている。この鉄砲数はイノシシに関する記述の少な

かった白川村の方が、莊川村より多い点は注目される。後述するが、当時は白川村の方がイノシシの捕獲は多かったようにも考えられる。

一方、庄川の下流、白川村の北に接する富山県の五箇山地域では、著しく多数の威鉄砲が貸与されていた(矢ヶ崎, 1992)。ただ、五箇山のうちでも、飛驒に接する上平村域の上流部では鉄砲が少ないか所有しない村もあった。加賀藩と天領との相異はあるものの、若干の鉄砲のあった白川村域の状況は、五箇山と似た傾向にあったように思われる。

**郡上郡(高鷲村・白鳥町)**

高鷲村の蛙ヶ野高原は庄川・長良川の分水界にまたがるが、同村域は南側に広く、長良川の源流域にある。この地域ではイノシシが低地から低山帯に住

み(高鷲村史, 1986)、また焼畑耕作が広く行われていた。農民は掘立小屋をつくり、老人などが夏から秋にかけてここに泊まり、耕作や鳥獣の見張り番をした。これを「こもり小屋、夜守小屋」ともいった(山川, 1960a)。大家族制の白川村の場合と異なり、老人が猪追いをした点が特色といえる。具体的な猪追いの手段は示されていないが、白川郷と同様なものと推察される。

鉄砲をみよう。見当山(1,352m)の麓の鷲見中切村では、宝暦12年(1762)「猪鹿害ふせぎ」の目的で、2人が玉込鉄砲を1挺ずつ郡上藩より借りていた(山川, 1960b)。また、安永2年(1773)「郡上郡在々御備鉄砲」(白鳥町, 1973a)のうちに、西洞に威筒2挺、中切・鮎走・向鷲見に玉込筒が各2挺ずつ、切

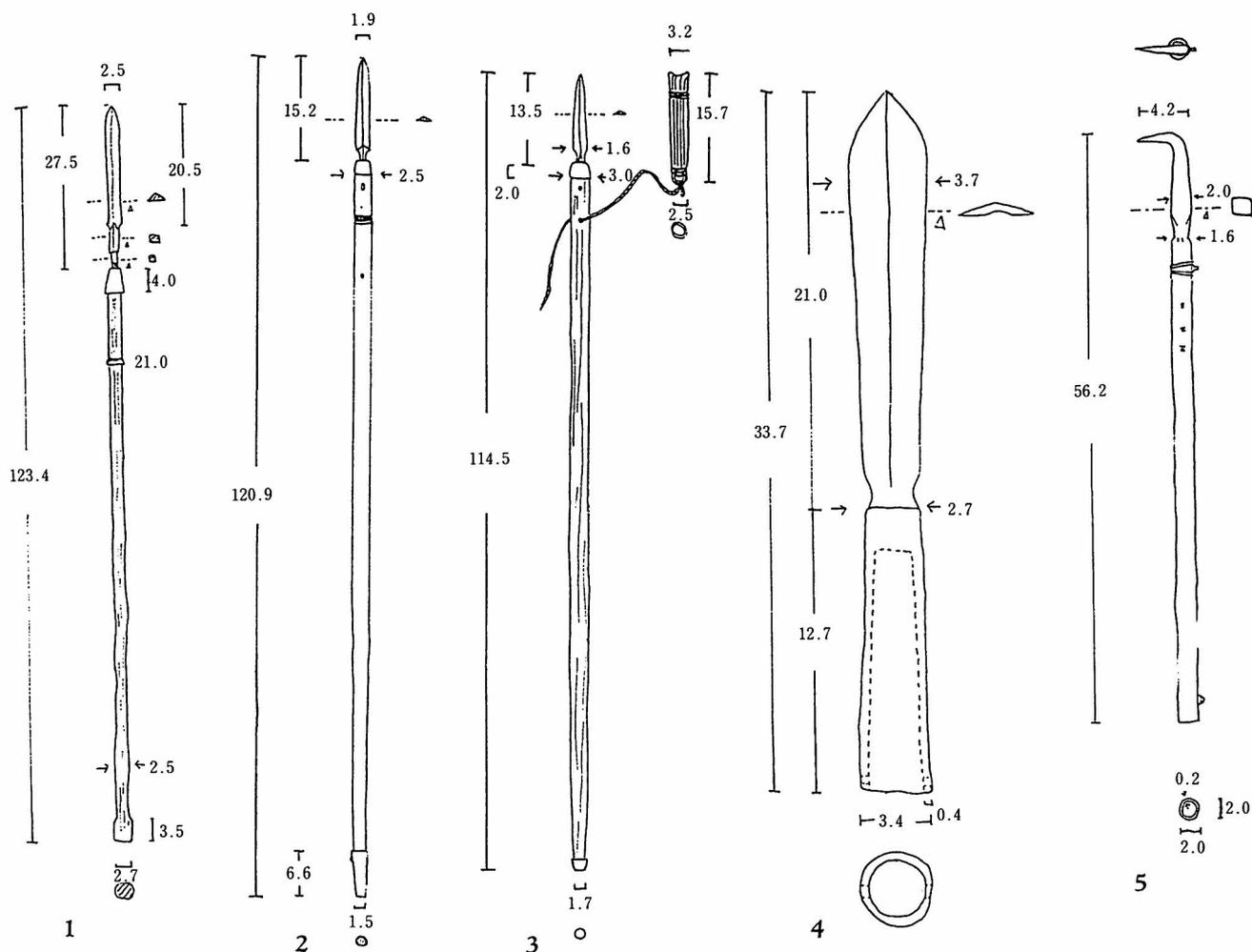


図5 白川村の槍と火縄銃

- 1：白川郷合掌の里，山下家旧蔵。室町時代の槍を改造したもの。
  - 2，3：御母衣 旧遠山家旧蔵。江戸時代のもの。
  - 4：白川郷合掌の里蔵。野鍛冶作。
  - 5：火縄銃銃身。平瀬坂本家旧蔵。江戸時代初期のもの。
- (白川村教育委員会資料)

表1 白鳥町における鉄砲所持数の推移

	安永2年(1773)					明治14年(1881)			
	威筒	玉込筒	玉込威筒	獵師筒	計	職獵銃	軍用銃	無税獵銃	計
越佐	1	1			2			6	6
中津屋		1		1	2			3	3
大島	(3明治5)							1	1
為真		2		2	4				
白鳥	1	1		2	4			5	5
前谷	2				2	2			2
歩岐島		1			1	1		3	4
長滝		1			1			1	1
二日町	1				1	1			1
向小駄良			1		1				
那留		3		3	6			4	4
陰地(恩地)								2	2
野添		1			1	3		4	7
六ノ里							4	15	19
棚洞		2			2				
計	5	13	1	8	27	7	4	44	55

『白鳥町史 史料編』(pp.634-635, 安永2年), 『郡上郡各村畧誌』(明治14年岐阜県記録課)により作成。

立に獵師筒1挺, 玉込筒1挺が貸与されていた。玉込鉄砲は自村内で用い, 他村でも使える獵師筒とは異なり, 使用が制約されていた。この地域ではイノシシの生息数も多かったと思われるし, 猪狩も盛んであったであろう。前記明治14年の『各村畧誌』では, 鮎立に職獵銃2挺, 無税獵銃16挺, 鷺見に職獵銃1挺があったことからしても, 猪狩の盛人や, また猪害のほども推察される。

白鳥町においても, 焼畑は重要で, 農民はヒエやほかの雑穀を主食とした。焼畑は大日ヶ岳(1,709m)の中腹に及ぶものの, 標高1,000mの地点に「実いらず」の地名が残っている(白鳥町, 1976a)ことからして, その耕作限界が知られよう。ここでは安政4年(1857)6月に村中で「猪狩」を実施した農事記録があり(白鳥町, 1976b), 当然に鉄砲も用いられたであろう。ついでに記せば, 昭和51年ころ畑作物に野良犬の被害もあり, 毎年野犬狩りも行った(白鳥町, 1976c)。これは常畑に対するものであろう。

白鳥町における鉄砲の所有状況のみよう。前記「郡上郡在々御備鉄砲」には, 多くの村々に玉込・威・獵師の各筒の貸与数が記されており, これらと明治14年の数とを併せ表1に示した。白鳥町域は初雪時, 白川郷方面よりの移動イノシシの通路に当たること(岐阜県哺乳動物, 1987b)からしても, 鉄砲をも用いてのイノシシの捕獲は著しかったと推察される。なお, この文書には記されていない「山方ニ御座候」

という大島村で, 明治5年の「明細書(写)」には, 威鉄砲3挺があること(白鳥町, 1973b)からして, 鉄砲配備の全体像や推移を明らかにするには, かなりの困難が伴うものと思う。表1で注目されるのは明治14年の無税獵銃で, 多くの集落に普及しているのは, イノシシの捕獲が行われていたことが推察される。ちなみに, 威銃は上述のように, 全県下で数えるほどしかで, 極めて少なくなった点は著しい特色である。

なお, 白鳥町教育委員会の清水直美学校教育課長補佐から次のように伺った。近年でも北濃の北の石徹白に接する干田野の山地添いに, 猪害があり, 柵を設けて防ぎ, 獵銃で駆除もするという。

### 旧石徹白村

白山の南麓に位する石徹白は, 別山を経由して美濃から白山登頂の中間の村である。白山三馬場の一つ, 長滝寺(白鳥町)からこの白山中居神社を経て登頂したもので, 御師の村として著名であった。石徹白とイノシシに関して石徹白忠氏より伺った話を次に記そう。すなわち, 雄略天皇9年(466)に勅命で白山中居神社に奉幣帛を修めに来た大臣平群真鳥の従者, 大途見彦(伊ノ原ノ宿称)はここで遊獵して, イノシシ10頭をみて驚き, 「猪ノ原」と称した。イノシシが多数住んでいたが, 里人に害を与えた記録はなく, これよりこの里を「猪ノ原ノ郷」と称したという。当時は農耕も進んでいなかったためともみられるが, イノシシの生息域といえよう。この話は泰澄大師の白山登頂の養老元年(717)より前のことである。

石徹白は山奥としては珍しく開けた地形のところとの印象が筆者にはある。宮本常一博士が訪れ, 『越前石徹白民俗誌』(1949)の著作が著名である。共有山で焼畑を耕作し, ヒエを盛んに作った。山小屋を立て忙しい時(播種期・収穫期)だけ短期間寝泊まりした(宮本, 1992; 佐々木, 1972a)。イノシシは中国地方から毎年山づたいに来るらしく, 北陸線開通後は全くなくなった。それまでは落とし穴でイノシシを獲り, 鉄砲やヤリを用いた猪狩は楽しいものであった(宮本, 1992)。猪害に対する辛苦のことは記されていない。鉄砲については近世, 越前大野郡下の郡上藩領(約70か村)(福井県立図書館・福井市郷土誌懇談会, 1958)に, 御借鉄砲64挺(年月は未詳)があり, うち9挺が石徹白(3か村, 無高)に

当てられていた(大野市史, 1980)。これが威鉄砲であったかは明らかでないが、石徹白への割当数は多く、猪害も著しかったものと推察される。

なお、現在も猪害は若干みられる。石徹白忠氏によれば次のようである。周囲の山地にはドングリなど木の実が豊富なせいか、猪害はあまりなかった。ドカ雪の来た時、郡上方面へ移動するイノシシを獲った。「けものみち」にそってシシ穴を掘り捕ったし、シシツキヤリも用いた。防除では猪垣は設けず、威鉄砲はなく、専らシシオドシによった。それはカウスを古い鍬やマンガワでこすり、音を立てたり、藤づるを張って引っ張り、呼子のように音を出して追った。これは子供の仕事であった。現在はバクチクを使って追いもする。シシ追いに子供で対応できたことは、その被害のさして著しくなかったことを示すものともみられる。

### イノシシ防除にまつわる諸相

#### 防除

白山東・南麓における焼畑を主とした山村地域における猪害防除につき、以上地域的にまとめて記した。なお、直接この地域を扱ったものではないが、大坪二市著『農具揃』(明治14年)の猪害防除は興味がある。本書は飛驒の吉城郡国府町を中心とした事情を記したものとみられるが、大坪氏は当時、日本三老農の一人に数えられた人物で、本書は注目すべきものといえよう。本書によれば、威鉄砲でイノシシを追ったが、年によっては苗代にも障るので、「村中出て山狩りをいたし、洞々に火を焼き、鉄砲をはなつ」のであった。これは春先の処置で、3月の項に記されている。また百合・つくいも・豌豆なども夥しく荒らされ、百合畑では四方に「繭ヒ、」(蚕蛹)をまいておけば、決してイノシシは近よらないと記してある(谷川, 1970a)。これは臭気を利用する点で、特色がある。なお「こかい第一二仕候場所ハ…大野郡白川郷」といわれ、養蚕・製糸の盛行した白川郷(上島, 1952)でも、当然この方法は用いられたと思われる。

ヒエは飛驒山村の主食であり、白川村・荘川村や石徹白ではその作付比率は大であった(佐々木, 1972b)。したがってヒエの猪害防除は極めて緊要事であったといえる。ところで、『飛州志』にはヒエの種類が列記されており、そのなかに「猪食ハズ」を挙げている(長谷川, 1969b)。稲の芒の長いものはイノシシが食べないという石垣島での事例(矢ヶ崎,

1994)からして、これも芒の長いヒエと推察した。飛驒でも毛稲より坊主稲の方が猪害が多い(代情, 1940)というから、同じ傾向と考えられる。橘礼吉氏によれば、ケビエといわれるノゲの長いもの(5-6 mm)が、九頭竜川の奥地、穴馬(福井県和泉村)にあったが、今はみられないという。和泉村の焼畑では、第1年目にヒエを多く作り、しかもその多くは穂に有毛の毛ビエであった(福井県教育委員会, 1966)。これは「猪食ハズ」と同類のものと思われる。美濃でも山県郡美山町日永の山村では、毛ビエのほかは作らなかったが、これは猪鹿猿に食べられなかった(松永, 1994)という。

そこで有芒のヒエについて調べ、次のような事例を知った。愛知県北設楽郡では「毛の有る」ヒエを山に作ったが、これは「鹿鳥のおかさぬ者」であった(北設楽郡, 1970)。神奈川県山北町玄倉では焼畑のアワ畑の周囲にイノシシのきらう毛ビエを蒔いた(野本, 1984c)。奈良県大塔村ではキリハタに毛の多いヒゲビエを作った(宮本, 1973b)。稲については伊那谷で、ふるくは有芒種が多く、収穫も、藁も良い品種であったが、芒叩きに苦勞した(向山, 1984)。これも同様に猪害にはよかったであろう。

猪害防除には多大の経費を要した。『農具揃』にはつぎのように示している(谷川, 1970b)。すなわち、田1反歩当たりと計算して、「猪の夜守当番 又山猪狩り」の費用は10人で、この人夫数は耕耘の項目中最大であった。人夫数総計71人のうち、猪害防除は14%を占めていたのである。吉城・大野郡下でも「猪番獵人」や「猪番夜廻」に多数の費用を要した文書例がある(角竹, 1969)。一方、白川村教育委員会で鳩谷の藤井藤兵衛家、萩町の和田弥九衛門家の古文書を閲覧したが、「村方人足帳」などに猪害防除に関するものはなく、専ら道路や橋の維持に当てられていた。猪追いなどは自家の豊かな労働力により家ごとに処置していたとみられる。

#### 鉄砲

江戸時代、鉄砲の取り締まりは嚴重であった。寛政2年(1790)の「飛州高山陣屋其外取締方申上候書付」(田中, 1925a)には鉄砲についても記されている。それによると、飛驒で獵師鉄砲は225か村に724挺が貸与され、役所より鑑札を渡し、1挺につき1カ年に永75文の役永を課していた。他方、猪鹿威鉄砲には役永の取立はなかった(弘化2年(1845)『飛驒郡代地方演説書』)(岐阜県, 1966)点は注目される。

役永を納めるためには、猪鹿の成果を挙げる要が

あったと思われる。『斐太後風土記』には各村の産物が記してあり、白川郷のイノシシの記載(蘆田, 1930a)をみると、荘川村に属する六廐・尾上郷、白川村の牧・長瀬・平瀬(3疋)・木谷・小白川の7村が挙げられている。白川郷全21村に対しては僅か1/3に過ぎないものの、大野郡のうちではイノシシの産物の多い地域であった。ただし、7村のうち5村が白川村に属していた点よりして、近世には白川村の方が荘川村よりはイノシシの生息は多かったように推察される。この傾向は前記明治14年「各村畧誌」の鉄砲数とも符合するよう思う。なお、昭和10年ころは、白川村の山中でイノシシを見ることは珍しかった(代情, 1940)というから、庄川の谷筋で、荘白川村域でのイノシシの生息や猪害には濃淡や変化があったように思われる。

### イノシシの利用

農作物に対する猪害防除は、イノシシの耕地侵入を防止すればよく、猪垣の設置、音や臭を用いての追い払いで効果を挙げられる。一方、狩猟は捕獲が目的で、防除を効果的にするものではあるが、捕獲物の利用が重要であり、また娯楽の面もあり、両者は性格を異にする。

猪肉の食用は『飛州志』にもみられ、食用獣類の筆頭に「野猪」が挙げられている(長谷川, 1969c)。また『農具揃』には「毒の類」を載せ、「なますと猪」「猪肉に生姜」の悪い食べ合わせの事例を挙げている(谷川, 1970c)。その真偽のほどはともかく、53例の伝承中にイノシシに関する2例のあることは注目される。

一般に猪肉は美味で人々に喜ばれて食べられたようである。「ぼたん」「山くじら」などとも呼ばれ、高山や郡上八幡の町では店売りされていた(代情, 1940; 岐阜県哺乳動物, 1982; 岐阜県高等学校, 1974)。また、明治元年(1868)の通達で、「猪のゐ」は熊の胆・皮、鹿の皮・角などとともに商品価値があり、相当の値段で商法局が買い取るので、「猟師共相対売一切致間敷」く、取り集めて高山商法局へ差し出すべき事とした(田中, 1925b)。

一方、猪・鹿の肉・皮は口留番所を通して他国へ移出されてもいた(矢ヶ崎, 1957)。口留番所は国境18か所にあり、通過荷物に対して口役銀を取り立てていた。文化5年(1808)12月8日、白川村から富山県利賀村に抜ける道筋にあった牛首口番所の御用留には、獣皮の口役取立を厳しく取り締まる通達を記してある。その文書は次のようである(田中, 1925c)。

「宿継を以致啓上候。然は当冬大雪に付御存知之通、於村々猪鹿猿其外獸類多分取し趣に付、来巳二月中迄、一村限員数取調置書出可申旨先達触流し有之候。然る処諸口より御差越し類寄帳に、右皮口役一向少分勝に相見申候。勿論御油断有之間敷候へ共、来春國中より獸類、何方とも書出候上に、諸口皮口役相増不申候而は、当時御勤番御手抜にも可相成間、随分不洩様御取立可被成候。尤百姓方に而、着料□□つゝぬき等に遺ひ可申候得共、少々之儀ニ可有候、いづれにも当押詰より、来二三月迄多分相増不申候而は、趣意相立申間敷候。能々御勤考可被成候。

右之段可得御意、如此御座候。

辰十二月八日 掛御用場

この年は未曾有の大雪で、益田郡萩原町上呂には「猪鹿十方迷谷底川岸成群迂惑餓死或突殺ス何千共不知数尸山埜晒ス勞敷不堪見而建立」と記す「鹿供養塚」が建てられたほどであった(野村, 1969)。憎むべき猪鹿ではあるが、多数の斃死に供養塚を建てた農民の心情に感心させられる。この冬は多くの猪鹿が獲られもし、この年以降はイノシシ数が減少した(代情, 1940)ことは注目されよう。獲られた獣皮などのうち百姓の使用分は少量で、多くは国境の諸口から移出された筈である。ところが口留番所通過の荷物を記し、口役銀を取り立てた「類寄帳」には皮口役は少ない。来年2-3月までの冬季は多い筈(雪国は少ないが)であるから、油断なく取り締まってほしい。さもないと番所勤務が手抜きとも思われるとして通告を全番所に出したのである。

ただし、獣皮や胆などの移出はさして多くはなかった。明治3年(1870)の飛驒からの移出品目の中に、熊胆大小凡20、猪胆大小凡50、鹿角凡50本が記されている(田中, 1925d)。価格では熊猪胆大小取交代金200両、熊皮20枚代金40両、鹿・羚羊皮70枚代金35両であった(蘆田, 1930b)。狩猟の産物は若干の現金収入には貢献していたのである。

### イノシシの移動

白山の周辺地域で積雪期におけるイノシシの移動については前述したが、白川郷や郡上郡北部では美濃の暖地との間を往来する(岐阜県哺乳動物, 1987b)。一方、イノシシの生息には高距限界もある。長野県域では夏は標高1,700m、冬は1,400mを限界とする(東春近村誌, 1972)。岐阜県域では1,500mとみられることも前述した。

そこで、白山周辺地域でのイノシシの移動に注目

したい。標高1,500mをイノシシの生息限界の目安と一応考えて、白川郷から郡上郡北部の地形を観察しよう(図1)。白山を中心に北、石川・富山県境の大門山(1,572m)、南の福井・岐阜県境の願教寺山(1,691m)の間は、両白山地でイノシシ移動の障壁となり、白川郷の地域と石川・福井県側との移動は不能とみられる。庄川筋を下り、富山県五箇山との移動は、1,500m以下の地域が比較的広いものの、幼年谷が深く発達していることからして、著しいとは考えにくい。一方、白川郷から蛭ヶ野高原を越えて、郡上郡下への移動は容易で、さらに南下も可能である。

他方、白川郷の東部、宮川筋の高山盆地との間には、飛驒高地の西縁の山地がほぼ南北に走る。この高地には北に猿ヶ馬場山(1,872m)、南に鷲ヶ岳(1,672m)の高山があり、その中間山地は1,500m以下の山地が続く。イノシシの東西移動の障壁性は劣るものの、必ずしも自由な移動を可能にするとはみられない。白川郷の地域はイノシシの生息には地形的に袋小路的であり、南の郡上郡方面との移動が容易と考察されるのである。

### むすび

岐阜県下の白山東・南麓の地域は、深雪地帯で、雪に弱いイノシシは初雪時に南方へ移動する。この時期は狩猟の好期で、近世には主にヤリで捕獲した。この地域は焼畑の盛行地域でもあり、猪害防除に苦労してきた。焼畑の周囲に火道を伐り、イノシシの侵入を防ぎもしたが、主体は主作物のヒエの成熟期にし小屋を設け、一晩中各種の手段により音を出し、音声を発して追った。この夜守の労働は大変な仕事であった。猪垣は荘川村の南部一庄川の源流部一で用いられ、現在もこの地域では電気柵・トタン柵・バクチクなどで耕地を守っている。これは被害の著しい地域といえよう。白川村では大家族制の時代、労働力も豊富であったせいか、若者が夜守をしたが、他域では老人・子供が担当した。このことは猪害が比較的軽い地域ともいえよう。一方、消極的な手段ではあったが、イノシシの嫌う有芒の稗を耕作したことも注目される。また、けものみちや畑に接して落とし穴を設け捕獲することもあった。鉄砲の利用は天領の飛驒では、さして著しくはなかったようにみられる。他方、郡上郡の高鷲村・白鳥町域では、近世から明治にかけてかなり多かった。なお、白川村では代官貸与以外の鉄砲が利用されてい

たようでもある。文化5年(1808)の大雪で、飛驒から南へ移動できぬイノシシが多数斃死し、これを機にイノシシは減ったという。白川村は現在イノシシの生息をみないが、近世にはかなり生息していたようである。

イノシシは近世にはヤリを用いて若干捕獲され、肉・胆・皮などが売られ、他域へも移出された。しかし、農民にとっては猪害防除が重要で、憎むべき存在であったが、前記大雪時、供養塚を建てた心情には注目される。

岐阜県下の白山東・南麓の地域では、イノシシの移動は地形的に制約されている。庄川筋の白川村・荘川村では、白山の西側石川県や、北の下流富山県の地域、東の庄川東部の山地を経て移動はできず、南の郡上郡へ移動する。南麓の高鷲村・白鳥町域では現在もイノシシの生息をみ、猪害防除に苦心している。なお、猪垣を設ける荘川村の庄川源流域は、猪害の著しい清見村と接する地域であり、イノシシの生息も多い地域とみられる。

本研究では岐阜県図書館で多くの資料を閲覧した。また、白川村教育委員会では谷口尚教育長、腰山恵一係長、角竹弘村史編集室長、荘川村教育委員会では村上秋夫事務局長、白鳥町教育委員会では清水直美学校教育課長補佐、そして石徹白の石徹白忠氏に、親しく多大かつ有益な教示をいただいた。深甚の謝意を表する次第である。石川県側では橋礼吉氏より教示を得、白山自然保護調査研究会の研究費を利用できた点、有難く思っている。

### 文 献

- 蘆田伊人(1930)斐太後風土記。雄山閣、東京、a上254-310、b下286-287。  
 代情山彦(1940)飛驒の猪。ひだびと、8-8、352-356。  
 江馬三枝子(1975)飛驒白川村。未来社、東京。  
 福井県教育委員会(1966)穴馬の民俗(和泉村の民俗)。福井県教育委員会、福井、53、56、-。  
 福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会(1958)越前名蹟考。福井県郷土誌懇談会、福井、582-700。  
 岐阜県(1966)岐阜県史。史料編、近世二、岐阜、814-816。  
 岐阜県(1978)第2回自然環境保全基礎調査、動物分布調査報告書(哺乳類)。岐阜県環境部自然保護課、岐阜、22-28、63。  
 岐阜県哺乳動物調査研究会(1982)岐阜ふるさとと動物たち。岐阜日日新聞社、岐阜、22。  
 岐阜県哺乳動物調査研究会(1987)続岐阜ふるさとと動物たち。岐阜日日新聞社、岐阜、a34、b33。  
 岐阜県高等学校生物教育研究会(1974)岐阜県の動物。大衆

- 書房, 岐阜, 49.
- 岐阜県記録課 (1881) 明治十四年八月調査飛騨国大野郡各村  
畧誌・同郡上郡各村畧誌 (岐阜県図書館蔵). 岐阜.
- 長谷川忠崇著・岡村利平編解説 (1969) 飛州志. 岐阜県郷土  
資料刊行会, 岐阜, a37-38 b20 c18.
- ひだびと編輯部 (1935) 飛騨地方御尋答書. 享保十二年 (史  
料), ひだびと, 3-7, 14-15.
- 東春近村誌編集委員会 (1972) 東春近村誌. 東春近村誌刊行  
会, 伊那市, 88.
- 環境庁 (1983) 第2回緑の国勢調査-第2回自然環境保全基  
礎調査報告書. 環境庁, 東京, 108-110.
- 川口孫治郎 (1934) 飛騨の白川村. 伊住書店, 高山市.
- 北設楽郡史編纂委員会 (1970) 北設楽郡史. 歴史編, 近世,  
北設楽郡史編纂委員会. 愛知, 設楽町, 106.
- 清見村教育委員会 (1986) きよみ風土記. 清見村, a154-156  
b153.
- 倉田一郎 (1995) 農山漁民文化と民俗語. 日本民俗文化資料  
集成, 第16巻, 三一書房, 東京, 579.
- 小山修三・松山利夫・秋道智彌・藤野淑子・杉田繁治 (1981)  
『斐太後風土記』による食糧資源の計量的研究. 国立民族  
学博物館研究報告, 6-3, 国立民族学博物館, 大阪, 505.
- 松永美吉 (1994) 民俗地名語彙事典 (上). 日本民俗文化資料  
集成, 第13巻, 三一書房, 東京, 446.
- 宮本常一 (1992) 越前石徹白民俗誌その他. 未来社, 東京,  
70-77.
- 宮本常一 (1973) 吉野西奥民俗探訪録. 日本常民生活資料叢  
書, 第19巻, 三一書房, 東京, a487 b316.
- 向山雅重 (1984) 伊那農村誌. 慶友社, 東京, 6, 295.
- 野本寛一 (1984) 焼畑民俗文化論. 雄山閣, 東京, a178 b37-38  
c177.
- 野村武夫 (1969) 鹿塚の由来. 飛騨春秋, 14-3, 21-23.
- 奥美濃路の自然調査団 (1981) 奥美濃路の自然-白山山麓一  
帯の動・植物調査. 奥濃飛越観光連盟, 白鳥町, 白山国立  
公園岐阜県協会, 白川村, 37-39.
- 大野市史編さん委員会 (1980) 大野市史, 第2巻. 諸家文書  
編 一, 大野市役所, 大野市, 7-14.
- 佐々木高明 (1972) 日本の焼畑. 古今書院, 東京, a204 b187.
- 白川村史編纂委員会 (1968) 白川村史. 白川村史編纂委員会,  
白川村, 70.
- 白鳥町教育委員会 (1973) 白鳥町史, 史料編. 白鳥町, a634-636  
b1178.
- 白鳥町教育委員会 (1976) 白鳥町史, 通史編, 上巻. 白鳥町,  
a524 b526 c41.
- 角竹喜登 (1969) 猪追の文献例. 飛騨春秋, 14-3, 25.
- 荘川村史編纂委員会 (1975) 荘川村史. 荘川村, a上27, 482-483  
b下144.
- 高鷲村史編纂委員会 (1986) 高鷲村史, 続編. 高鷲村, 19.
- 田中貢太郎 (1925) 岐阜県飛騨国大野郡史. 升重書店, 高山  
市, a中巻680 b下巻148 c中巻810-811 d下巻359.
- 谷川健一 (1970) 農山漁民生活. 日本庶民生活史料集成, 第  
10巻, 三一書房, 東京, a152 b170-171 c166.
- 富田礼彦 (明治) 斐太後風土記, 写. 巻八, (国立公文書館蔵),  
東京.
- 上島正徳 (1949) 飛騨大野郡に於ける焼畑の分布. 地理学評  
論, 22-10, 329-333.
- 上島正徳 (1952) 白川郷の経済地域的構成. 地理学評論, 25-8,  
295-303.
- 上島正徳 (1956) 濃飛の山地における焼畑. 現代地理講座,  
第2巻, 山地の地理, 河出書房, 東京, 292.
- 浦山佳恵・高橋春成 (1995) 岐阜県清見村周辺におけるイノ  
シシの分布変動と住民対応. 地理学評論, 68-10, 680-694.
- 矢ヶ崎孝雄 (1957) 飛騨における近世末期の商品流通-総括  
的な研究-. 金沢大学教育学部紀要, 5, 27-47.
- 矢ヶ崎孝雄 (1963) 山村における郡県界の変更-白山麓の場  
合-. 地理学評論, 36-6, 62.
- 矢ヶ崎孝雄 (1992) 北陸における猪害防除の研究 (一). 金沢  
大学日本海域研究報告, 24, 98-104.
- 矢ヶ崎孝雄 (1993) 北陸における猪害防除の研究 (二). 金沢  
大学日本海域研究報告, 25, 185-195.
- 矢ヶ崎孝雄 (1994) 沖縄県下の猪垣 (三)-八重山-. 文教大  
学教育学部紀要, 28, 41.
- 山田白馬 (1940a) 焼畑仕 (なぎし)-農山村の行事-. ひだ  
びと, 8-6, 272-277.
- 山田白馬 (1940b) 焼畑雑子 (なぎばやし). ひだびと, 8-7,  
303-307.
- 山川新輔 (1960) 高鷲村史. 高鷲村, a637-641 b277.